第2 教育研究団体の意見・評価

○ 日本会計研究学会

(代表者 平 松 一 夫 会員数 約1,850人)

T E L 03-3293-7061

1 前 文

本年度の問題は、例年と同様に、第1問、第2問、第3問の三部構成で、第1問は二つの設問(A及びB)に分かれており、実質的には4問で構成されている。試験問題の分量はやや多めであるが、難易度を考慮すれば、試験時間(60分)で十分に解答可能であろう。

出題内容については、簿記一巡の手続、本支店会計、特殊商品売買、伝票会計、仕訳集計表、商品有高帳、決算手続などが出題されており、簿記の教科書の内容に沿った問題構成となっているとともに、簿記の出題範囲全般から偏りのないように出題するという配慮がなされている。

以下、2において問題の概要を解説し、3では試験問題全般に関する若干のコメントを述べたい。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

上述のとおり、本年度の問題は大問4問で構成されており、第1問の設問Aは簿記一巡の手続、簿記上の取引、取引と勘定に関する簿記の基本的知識、設問Bは本支店会計と特殊商品販売(委託販売と試用販売)を問う問題である。第2問は取引の仕訳、伝票会計(5伝票制)、仕訳集計表、商品有高帳を組み合わせた問題である。第3問は、決算関連の残高試算表、修正事項、決算整理事項、損益勘定及び繰越試算表を用いた複合問題であり、昨年度も類似の問題が出題されていた。

試験問題の難易度は、日本商工会議所主催の簿記検定試験の商業簿記で言えば4級から2級に相当するもので、初級ないし中級程度の簿記全般に関する理解を試すには適切な問題である。また、60分という試験時間で解答することが求められるが、各問題の難易度を勘案すれば、問題の分量は適切であろう。

設問数の内訳と大問ごとの配点は、第1問の設問Aは問いが三つ、設問Bは問いが二つ、合計五つの問いで40点の配点、第2問は問いが四つで配点が30点、第3問は問いが五つで配点が30点である。解答記号に対する配点は、記号一つにつき2点のものと複数の記号全てが正解して2点のものがある。昨年度と異なり3点の配点箇所はなかった。解答箇所の設定及び配点にも出題者の配慮がうかがえる。

以下、設問ごとに解説する。

第1問は、AとBの二つの独立した問題に分かれている。

Aは、簿記一巡の手続、簿記上の取引、取引と勘定に関する簿記の基本的知識を問う問題である。難易度は高くないが、受験者に確実に点数を取らせようという配慮が伺える問題である。

問1は、簿記一巡の手続きに関する、諸帳簿の連携的な記入・転記・決算・開始記入の流れが理解できているかを問う問題である。**アイ**は、主要簿の仕訳帳と総勘定元帳について、その内容が

理解できているかを問う問題である。【ウ】は、仕訳帳から総勘定元帳の勘定口座への記入を「転記」ということを確認する問題である。そして【エ】は、取引を仕訳し、その金額が総勘定元帳から合計試算表へと流れていく際の基本となる原理に理解しているかを問う問題である。この問題は、全体として難易度は高くないと思われるが、複式簿記を学ぶに当たって、学んでいる事柄が、簿記一巡の手続きのどこに位置するかを常に的確に把握し、連続した処理体系の一貫として理解することができているかを確認できる良問であると思われる。

問2は、簿記が記録・計算の対象とする企業事象である簿記上の取引と、日常用語の取引を区別ができるかを問う問題である。この問題は、難易度は高くないと思われるが、仕訳をする以前に、日常用語でしか取引と呼ばれないもの（簿記上で記録・計算の対象とならないもの）を識別できるかを確認できる良問である。

問3の【カ】～【サ】の問題は、取引の8要素および貸方要素と借方要素の組合せが理解できているかを問う問題である。仕訳をする前段階として、取引を簿記上どのように分析するかが理解できているかを問い、また、原則として、費用の発生と収益の発生が同時に生起することがないなど、取引を簿記上分析する際の借方要素と貸方要素の組合せのルールが理解できているかを問うものである。仕訳を単に暗記しているだけの簿記の勉強方法では対応できない問題である。【シ】～【セ】の問題は、取引の仕訳ができるかを問う問題である。【シ】は、他人振出小切手を「現金」勘定で処理することが理解できているかを問う問題である。【ス】は、従業員の出張に当たり、旅費などの出張費用を概算で前渡した場合に、仮払金勘定の借方に記入することを理解できているかを問う問題である。【セ】は、消耗品の処理には購入時に費用処理する方法と資産計上する方法の二種類あるが、本問では未消費分(30)を決算に当たり繰り延べていることから、購入時に費用処理する方法を取っていることが分かる。したがって、決算時には、未使用部分を消耗品(資産)勘定に振り替え、同額の消耗品費を控除する(貸方)。ポイントとなる重要な取引の仕訳が理解できているかを確認できる問題である。

Bは、本支店会計、委託販売と試用販売に関する問題であり、受験者の勉強の幅及び確実な理解を問う良問である。

問1は、本支店会計の仕訳や仕組み(とその意味)が理解できているかを問う問題である。【ソ】～【チ】は本支店会計の基本的な仕訳を問う問題であり、【ツテ】は分記法が理解できているか、【トナ】は未達事項を処理すれば「支店」勘定と「本店」勘定が一致することを理解できているかを問う問題である。この問題は、オーソドックスな本支店会計の問題であり、本支店会計の理解を問う良問であると思われる。

問2は、委託販売と試用販売の仕訳の理解を問う問題である。委託販売と試用販売はともに複数の仕訳方法があるため、問題に示されている勘定科目から仕訳の方法を判断する必要がある。他の問題と比べて難易度は高いと思われるが、部分点で得点を稼ぐこともできるため、理解の程度を確認できる良問であると思われる。

第2問は、様々な取引の仕訳、伝票会計(5伝票制)、仕訳集計表、商品有高帳を組み合わせ理解を問うており、受験生には是非得点(部分点も含めて)してほしい問題である。暗記型の勉強では問われ方によって解答に戸惑うタイプの問題であろう。難易度は若干高めであると思われるが、重要なトピックスを扱っており、理解の程度を問う良問である。

問1の「ア」～「オ」は、様々な取引の仕訳ができるかどうか、伝票会計（5伝票制）の仕組みを理解しているかどうか（商品売買取引はいったん掛けとして処理し…という問題文の意味の理解も含む）を問う問題である。「ア」～「オ」で問われている取引の仕訳は基本的なものであり、確実に点を取ってほしい箇所である。

問2は、5伝票制の仕組み（商品売買取引はいったん掛けとして処理し…という問題文の意味の理解も含む）を理解して「資料1」の各取引の仕訳と転記ができるかを問う問題である。

問3は、「資料1」にある各取引の仕訳ができた上で、5伝票制の仕組みが理解できているかどうかを問う問題である。

問4は、商品有高帳の仕組みと、移動平均法及び先入先出法の記帳方法の理解を問う問題である。6月15日の返品処理の方法を理解していないと正答を導くことができないが、応用問題としては適切な問題であると思われる。

第3問は、決算関連の残高試算表、修正事項、決算整理事項、損益勘定及び繰越試算表を用いた複合問題である。

問1は、残高試算表、修正事項及び決算整理事項から、残高試算表と損益勘定の記入内容（金額）を推定させる問題で、修正事項・決算整理事項が理解できているか、試算表・決算整理・損益勘定の関連が理解できているかを問う問題である。「アイ」と「ウエオ」は決算整理事項(5)の内容から社債利息と社債の金額（償却減価法）を算定できるかを、「カキク」は残高試算表の繰越商品及び仕入の金額と決算整理事項(1)の期末商品棚卸高から売上原価を算定できるかを、「ケ」は借入金の利息を未払分も含めて算定できるか（決算整理事項(4)）を、そして「コサ」は繰越利益剰余金を残高試算表と繰越試算表の計上額の差額として算定できるかを、それぞれ問うている。

問2は、残高試算表、修正事項及び決算整理事項から、損益勘定の記入内容（勘定科目及び金額）を推定させる問題であり、問1と同じく修正事項・決算整理事項が理解できているか、試算表・決算整理・損益勘定の関連が理解できているかを問う問題である。「シス」は現金過不足（修正事項(1)）の処理、「セソ」は有価証券売買（修正事項(2)）の処理、「タチ」は貸倒引当金（決算整理事項(2)）の処理に関するものであり、修正事項・決算整理事項の処理に関する理解を問うている。なお、「タチ」に貸倒引当金に関する記入が行われることは、消去法により決定される。

問3は、残高試算表、修正事項および決算整理事項から、繰越試算表の記入内容（金額）を推定させる問題であり、問1及び問2と同じ趣旨の問題である。「ツテ」は前払保険料（決算整理事項(6)）の処理、「トナ」は買掛金（修正事項(3)）の処理、「ニヌ」は減価償却（決算整理事項(3)）の処理、「ネ」は法人税等（決算整理事項(7)）の処理の理解を問うている。

問1から問3により主だった決算整理事項（修正事項を含む）の処理が網羅されており、難易度はそれほど高くないが、基本的な事項の理解度を確かめる問題となっている。

問4は、繰越利益剰余金の借方残高を別途積立金で補填する仕訳処理（「ノハ」）を問う問題である。問題文及び繰越試算表に繰越利益剰余金の残高は借方であることが示されており、また別途積立金を用いることも明記されているので、難易度は高くないと思われる。

問5は、新株発行による増資の処理を問う問題である。「ヒヘ」は払込金額のうち資本金に組み入れられない金額の処理を、「ヘホ」は株式の発行に要した諸費用の処理を問うている。これも資本に関する基本的な事項の理解を問う問題であり、難易度は高くないと思われる。

3 ま と め

本年度の問題も、例年どおり、初級簿記から中級簿記にかけての範囲全般から出題されており、資料に推定を行わなければならない箇所が多く含まれていることや、複数資料の関連付けが必要となる問題が適度に含まれていることから、受験者の基本的な思考力及び簿記の基礎知識を試すのに適した問題であると評価できる。ただ、出題に当たっては、応用力のない受験者は試験時間内に全て解答することが難しい分量と難易度の組合せを志向したものと思われるが、分量には例年と較べて大きな変化はない一方で、問題の難易度は少し下がったように思われる。

マークシート方式での出題による形式上の制約、高等学校学習指導要領や教科書の内容への準拠、他の科目または過年度の「簿記・会計」の難易度との調整、過去の出題内容・形式との重複への配慮など、作問は大変な作業である。問題作成部会の労を多とし、敬意を表したい。